

【明治大学国際総合研究所「第8回 EU 研究会」議事録】

- 開催日:2014年4月25日(木)
- 会場:明治大学駿河台校舎
- 基調報告:ミシュラン, フランク(明治大学国際連携機構特任准教授)
- テーマ:「ウクライナ危機を巡って——歴史の教訓」

I 基調報告:「ウクライナ危機を巡って——歴史の教訓」:ミシュラン, フランク

➤ 現在のウクライナ危機

第二次世界大戦以降の複雑な歴史を顧みない限り、ウクライナの現状は理解できない。また、ウクライナ自体についても、ロシア語圏である東部を除き語られることは少ない。例えば、キエフがロシアから離脱を望む理由を理解せずに、ウクライナの分裂について語ることはできないだろう。

2013年11月21日、ウクライナ大統領ヴィクトル・ヤヌコーヴィチは、ほぼ締結が決まったEUとの協定交渉を撤回しウクライナに衝撃を与えた。ポーランドやスウェーデンを除くEU加盟国はウクライナへの関心が薄く、ロシアの意図も見抜けなかった。マイダン広場のデモは2カ月間平和裏に続けられたが、首相辞任後も事態は沈静化せず、内戦へ発展する恐れからロシアやアメリカ、EUが干渉を始めた。力によるデモ鎮圧に対するフランスやドイツ、ポーランドの仲裁や、支持者の離反からヤヌコーヴィチ政権は崩壊し、ティモシェンコが代理大統領に就任するに至った。

➤ ロシアによるクリミア併合とウクライナの分裂

18世紀にオスマン帝国からロシアに併合されたクリミアは、1954年にフルシチョフによりロシアからウクライナに移管され、ソ連崩壊後はロシア黒海艦隊の基地として利用された。クリミアに居住していたタタール人はスターリンにより追放され、ソ連崩壊後に帰還したものの人口の約15%を占めるに過ぎず、住民の大半はロシア人であったため、ウクライナから離脱しやすい地域だった。そのため、ロシアはクリミアを通しウクライナに圧力をかけ、親ロシア派と親ウクライナ派との対立を契機に派兵すると共に、国民投票の結果を受け、クリミアのロシアへの併合が決定した。欧州ではある国が他地域を併合するのは、戦後初めてのことである。

ロシアは欧米による制裁に妥協しないばかりか、ウクライナ国内のロシア人勢力を通し圧力をかけ続けたことから、ドネツクを中心にウクライナ東部が離脱する恐れがある。また、ウクライナに派遣された軍もロシア特殊部隊とは限らず、住民の支持を得ているか不明だ。

ウクライナの東部と南部では主にロシア語が使われ、マイダン運動の支持者が多い西部と北部ではウクライナ語が使われる。しかし、約2割のウクライナ人がロシア語を母語とするうえ、ラジオの歌番組の9割がロシア語であるなど、ウクライナでは日常生活でロシア語がよく使われる。ロシアはロシア語話者をロシア人と主張する傾向が見られるが、そのような解釈は国際社会では認められない。

➤ ウクライナの歴史——移民・侵略の道、馬の文明

EUとの協定否決に対するウクライナ人の反発の背後には、民主主義の問題と共にロシアとの複雑な歴史問題が横たわる。ウクライナ地方は人や文化が東西へ移動する要衝にあったことから、イ

ンド・ヨーロッパ語族がウクライナを経てヨーロッパへ広がった。そのほか、スキタイやフン、アヴァールなど様々な民族がウクライナを経由してヨーロッパをはじめ中近東、中国等へ移動した。

また、ステップが広がるウクライナ南部では紀元前 4000 年頃に馬の家畜化が始まり、中近東やヨーロッパ、中国にその文明が広がると共に戦術を大きく変えた。20 世紀前半まで馬と遊牧民のもつ技術は重要であり、ポーランドやロシア、タタールの支配に対し、騎兵となった農民が反旗を翻すコサック運動がウクライナで展開された。コサックは現在もロシア軍では高い評価を受けるエリート部隊である。

➤ ロシアの誕生とその支配

「ルース(ロシア人)」とは、東のスラブ人を意味する。ロシア帝国時代には、現在のロシアは「大ロシア」、ウクライナは「小ロシア」、ベラルーシは「白ロシア」と呼ばれ、その最初の国家はキエフで誕生した。プーチンが「ロシアはウクライナで生まれた」「キエフはロシア文明の始まり」と語るのはそのため、ロシアでは周知のようだ。

11 世紀、黒海からバルト海に及ぶ領土を保有したキエフ公国は、1051 年にキエフ大公の娘がフランス王アンリ1世に嫁いだことから欧州列強の一角を占めるに至った。しかし、モンゴルの侵攻により衰退し、その後モスクワ大公国やポーランド、タタール等によって国土が分割された。一方、当初モンゴルと同盟を結んだモスクワは、16 世紀に全ロシア人支配を目指しロシアと改称する。

キエフで誕生したギリシャ正教系のロシア教会は、ロシア全土に拡大すると共に、ローマ教会の影響下にあるポーランドと対立するなど、現在もその影響が残っている。ロシアはポーランドへの反感を利用しウクライナ独立を支援する一方、ウクライナ人もロシアの援助を求めた。また、ウクライナ人議会(ラダ)は 1654 年にロシア皇帝への服従を誓うが、ロシアは約束を守らず、ウクライナの自立、特権を認めず問題化する。

➤ ウクライナの国民意識とユダヤ人問題

ウクライナではコサック運動により国民意識が形成され、プガチョフの乱など数度の“一揆”が発生しロシアを脅かした。またポーランドの支配下にあった西ウクライナでは、1768 年にポーランド人貴族やカトリック教会に対する暴動が勃発し、ポーランド人やユダヤ人数万人が殺戮された。

19 世紀からロシア帝国で発生したユダヤ人が犠牲者となった一連の事件(ポグロム)の発端は、1881 年のアレクサンドル 2 世暗殺に対する反動政策であった。しかし、ユダヤ人虐殺は中世から欧州各地で発生していた。なかでも大国の圧力を受けたウクライナでは少数民族への反発が大きいと共に、ユダヤ人が多く居住していたことから特に激しかった。19 世紀後半から第 2 次世界大戦に至るまで、ロシアやドイツによるユダヤ人の犠牲者は、ウクライナを初めベラルーシ、ポーランド、バルト三国等を含めると数百万から 1,000 万人に及ぶとされる。

➤ 第一次世界大戦とロシア革命——戦場、鎮圧、虐殺

第一次世界大戦でロシアに勝利しウクライナへ進攻したドイツ軍と共に、ロシア革命によっても多くのユダヤ人が犠牲となった。また、ウクライナでは無政府主義者の活動に加え、独立運動も発生し、さらにソ連と対立するポーランドとの同盟が受け入れられず、状況は複雑化する。

スターリンの政権下、ロシアの工業化に必要な資本は国外から得られず、収奪された農作物の輸出で得た資金が充てられた。世界有数の小麦の生産地であるウクライナでは、クラーク(富農)が食糧収奪のターゲットとされ、農業集団化に抵抗した農民が粛清されるなど、200 万人以上が犠牲となったとされる。この状況は、農業が盛んな地域が飢餓に陥っている今日のアフリカと似ている。さらに 1920 年代前半から 30 年代後半、スターリンにより人口の一定割合が粛清対象とされた。



➤ ウクライナ西部の反ロシア主義と反ポーランド主義

オーストリア＝ハンガリー二重帝国領であった頃のウクライナ西部は、比較的自由であった。第一次世界大戦前、ウクライナはポーランドとチェコスロヴァキアに属す西部を除き、ほぼロシア領であったが、戦後、ポーランドの再建が決まると、住民の言語を基準にソ連との国境の制定が試みられた。しかし、ポーランドがソ連との戦争の後にウクライナ西部を譲り受けると、マイノリティであるポーランド人がウクライナ人を支配することとなり、反ポーランド主義が強まった。また、チェコスロヴァキアに支配された西南部では親欧色が強い。

➤ ドイツへの期待

第二次世界大戦前、ポーランド東部にはウクライナ人が多く居住していた。ドイツ軍によるウクライナ侵攻に先立つ1939年、ポーランド東部をソ連が占領し、多くのロシア人をウクライナに移住させると共に、食糧収奪のターゲットとした。また、ソ連はウクライナ西部に東部との併合を求めたため、ウクライナ西部でも強い反ソ連主義が台頭し、現在でも地域によって反ドイツの根底に反ロシア主義があるといわれる。一方、ポーランドからの独立運動もウクライナでは継続され、国境が幾度となく変わった。そのため、ポーランド人とウクライナ人との居住地の特定は困難である。

スターリンによる大飢餓や粛清、強制移住等で大きな犠牲を払ったウクライナでは、ドイツ占領後にドイツ軍の甘言から解放への期待を抱いた。なかでも農業地帯の人々が抱く期待は大きかったが、これはドイツ軍がユーゴスラビアで用いた戦略でもある。また、伝統的に反ユダヤ主義が強いウクライナ西部では、ユダヤ人虐殺に協力した者も少なくなかった。そのためウクライナ東部では、西部の人々をファシストと捉えるなど、いまだに癒えないその記憶を、プーチンに利用されている。

➤ 歴史の跡

悲劇的な歴史や強国に対する独立意識、コサックによるユダヤ人の虐殺からウクライナ人同士の対立が引き起こされるなど、ウクライナには根深い問題が山積している。ウクライナが分裂し、一つの国家として維持されることが困難な状況にあるのは、様々な要因が相互に影響しあうと共に、周辺国がその対立を利用しているためである。ウクライナがロシアかEUを選択する際の最大のジレンマは、地域により状況が異なることだ。ロシアとEU双方に、それぞれの役割があるはずだ。

II 質疑応答およびディスカッション

- ウクライナの東部と西部で異なるだろうが、EUとの関係強化を求める人はどのくらいいるのか。
- 前回の選挙では東部が勝利したが、かなり微妙な状況だ。現在の問題は、ウクライナがEUとロシアのどちらを選択するかだ。しかし、EUはウクライナを加盟国とは認めない。また、ロシアを恐れるスウェーデンや特に国土の3分の2を奪われたポーランドは、ウクライナへ圧力をかけた。
- ソ連崩壊後、ウクライナはポーランドとの友好に努め、それは両国主催によるサッカー欧州選手権にも表れている。ロシア人が多いウクライナ東部では、経済面などでロシアと深く結び付いている。
- 様々なシナリオがあるだろうが、連邦制は可能なのか。
- ロシアにとって連邦制は好ましい。もしロシアがウクライナ東部を併合した場合、カザフスタンなどロシア人が多い地域のほか、中国の反発も予想される。プーチンは世論を動かすためにナ



シヨナリズムを利用するが、ウクライナも同じことをしている。これに対しEUは全く機能していない。

- ロシアがさらに強硬な態度に出た場合、それを阻止するコンセンサスはEUにあるのか。
- 国ごとに状況は異なる。ポーランドはロシアの進攻を阻止したいが、ドイツにはガス供給問題がある。一方、ポルトガルは一連の問題に特に関心を示さない。これはナチスの進攻に対応できず、情勢が悪化した状況と似ている。現在のように国境問題が絡むと、どこかでロシアを阻止する必要があるが、EU各国の軍事力は縮小し、欧州に駐留する米軍も4万人程度で、さらに縮小している。
- EUもアメリカも、問題が拡大することを防ぐことによって、かつてドイツが引き起こしたような事態は避けられると考えているのではないか。
- 問題はウクライナが国家として体をなしていないことだ。プーチンは次のシナリオも考えているようで、人口の約40%がロシア人であるエストニア等に圧力をかけたことがある。
- ロシアはかつて、多くのロシア人をバルト海近辺の地域に移民させ、リーヴ人等、いくつかの文化を消滅させた。ソ連崩壊まで、エストニア・ラトヴィア・リトアニアの文化の衰退の可能性があった。そのため、バルト三国はソ連から最初に独立を果たした。一方、EUがウクライナに対して行動に出ないのは、連邦制を敷いていず、共同の外交・防衛政策を実施できないためだ。イラク戦争やリビアに対する軍事行動では、EUにまとまりが見られなかった。
- プーチンから見ればEUはまとまりもパワーもないが、EUの吸引力が東欧からバルト三国、バルカン諸国へ拡大した結果、ウクライナもEUとの協定を望んだ。危機感があるのはプーチンだろう。
- ロシアの再建を目指すプーチンは短期間で人気を博した。しかし、現在のロシアはガス等の輸出で維持されているだけだ。人口も減少し工業も落ち込むなど、衰退の道を辿っている。
- EUの世論はプーチンに甘い。ロシアはチェチェンで何万人もの犠牲者を出し、プーチン就任以来、人権も保障されていない。ロシアはソ連時代強国だったが、ソ連崩壊の時代から領土も人口も縮小し、経済力も弱まった。ロシアは多くの国や民族を吸収し、拡大していったことを忘れてはならない。
- クリミア併合は認められたということか。NATOも拡大を認めないだけで黙認している。
- そういふことだろう。クリミア併合直後、ロシアはウクライナに干渉を始めたため、クリミア問題が棚上げになった。これはプーチンの手腕である。
- スターリンは国際関係において合理的な判断をした。例えば「鉄のカーテン」をどこに敷けば戦争を回避できるかを考え、ソ連を防衛するには東欧からモンゴル、北朝鮮にわたる影響領域を維持すればよいと、拡大範囲も計画的だった。また、フランスやイタリアでは共産党が革命を画策したが、アメリカとの戦争を避けるため許さなかった。問題はプーチンが合理的に考えているかどうかだ。
- ドミノ的に拡大したEUにウクライナが接近することをプーチンが恐れた結果、ウクライナ問題が発生した。当初プーチンは防衛を意識したが、次第に自信をつけると共に、西側各国首脳の多くがソチオリンピックを欠席するなど、国際的孤立感もその背景にあるだろう。
- EUには軍事力も政治力もないが、経済力と民主主義がある。ウクライナがポーランド同様に民主化すれば、プーチン政権に悪影響が出る。プーチンがロシアで人気を博したのはクリミアへ



の対応と汎スラブ主義によってである。また、プーチンはロシアの不景気の原因は欧米にあるとしている。

- やはり経済の影響が大きい。ロシアでは資本流出が進んだ結果、経済が悪化した。さらにクリミアを抱えるとなると、ますます財政が苦しくなる。ナショナリズムだけではやっていけない。
- 逆の可能性もある。経済や内政が苦しくなると、政権維持のために外に強く出る誘因が働く。
- 20年前ならばEUがウクライナへ資金を提供できたが、現在はアメリカが資金を出さなければならぬ。プーチンはクリミアで年金を増額し、EUより資金があるように見せかけた。その結果、多くのウクライナ人がEUに加盟することによって生活が苦しくなると考えている。
- プーチンは統治の仕方を心得ている。EUはウクライナを緩衝地帯にしたいのではないか。
- EUにとって都合がよいのは、敵が現れたことだ。EUが発展した時代にはソ連の存在があった。ユーロミサイル危機の際、西欧には強く統一感を感じられた。また、ソ連のブロックが崩壊してから、EUは東欧の加盟を歓迎した。しかし、ヨーロッパの東西には“心の壁”があり、中央ヨーロッパでは「東欧の国」と言われたくないポーランド、チェコ等は自身を西ヨーロッパ人だと考える。経済が低迷するなか、ヨーロッパ人というだけで助け合うことができるかどうかはわからない。
- 将来、ウクライナに加盟してもらいたいと考えるEUの人は少ないのではないか。
- EU加盟には様々な基準があるが、ブルガリアとルーマニアの例から、EU加盟基準を守れない国の参加は当面ないだろう。ギリシャでは、資金を供与しても何も変わらず、ハンガリーでは民主主義すら危うくなっている。
- 現在のヨーロッパでは、EUが存在しなかった時代を知る人は少ない。EU以前の世界や、EUの成立過程といった歴史を知ることが重要だ。ミッテランは「ナショナリズム、それが戦争だ」(Le nationalisme, c'est la guerre.)と語ったように、EUでもナショナリズムは存在し続け、最終的に戦争へと向かうことを知っていた。第一次世界大戦から100年目を迎える今年も重要だ。
- ナショナリズムが戦争へ向かうことは、日本人も常に心に刻むべきだ。戦争の可能性のある間、人は緊張感をもってその排除のための犠牲を受け入れる。しかし、戦争の恐れがなくなった結果、ベルギーやスコットランドのように、地域で小さくまとまろうとする動きが進んでいる。
- ヨーロッパの緊張感の原因は、ロシアと共にEUの衰退にもある。もはやヨーロッパは何もせずつとも豊かではあり得ない。ユーロ導入後に税制統一等を行えばよかったが、そのチャンスを逸した。EUの予算はGDP1%程度のうえ、その50%以上が農業政策に充てられ、強力な政策が打てない。十分な予算が必要だが、その改革を加盟国の政府は反対する。
- ウクライナがEUへすり寄ったものの、経済的メリットが少なかったこともあるだろうが、ウクライナ東部の親ロシア派をロシアがコントロールし、サポートしていることはないか。また、今後EUが緩衝地帯としてウクライナをキープするための具体的手段は何か。連合協定を使い経済的にバックアップしていくのか。
- ウクライナとの協定も一カ国ずつ締結するなど、各国政府同士が話し合ったため、EUは何もできなかった。EU委員会は協定の準備を十分に行ったが、諸加盟国はポーランドやスウェーデン以外は興味を示さず、ロシアの介入にもポーランドやフランス、ドイツが対応しただけであった。
- EUを支える主要国もウクライナに関心はなく、何かを行う意志もないということか。

- ポーランドやスウェーデンはロシアの膨張を懸念しているので、ウクライナの民主化または EU との接近を積極的に指示してきた。その代わり、ドイツはロシアから安価なガスや石炭を輸入するなど、経済的なつながりがあるので、ロシアとの緊張感を緩めたい。また、豊かな経済関係のためドイツの意見をロシアが尊重することもあるだろう。問題はイギリスだ。ウクライナの富裕層 (oligarch) はイギリスへ投資を行っている。欧米による制裁の目的は、おそらくそこにあるだろう。
- 今後問題が生じるのはオデッサではないか。第二次世界大戦前、オデッサにはユダヤ人やルーマニア人、トルコ人、ギリシャ人など多くの民族が居住していた。だが、世界大戦時にルーマニア軍により占領され、大虐殺が行われた。クリミア同様、オデッサの人々も大戦の経験からロシアによる庇護を求めるかもしれない。オデッサでは、ロシア語を使う人々が大半を占める。